

3年2組

 「命」について見つめ直し 生きていくわたし  
 ～鶏との暮らしから学んだこと～


# 陽向（ひなた）にとっての幸せとは？

1月に入ると地域の方からご意見をいただきました。内容は、鶏の鳴き声がとても迷惑であり、朝から鳴いていて、鳴き声が非常に困るというものです。私と一緒にその話を聞いていたAさんは、「何度も鳴き声のことを先生に言っていた。とても怒っているように感じた」とみんなに伝えました。

想定はしていたものの、やはり実際にこうした声を聴くと、何とも言えない悲しい気持ちになります。すぐさま子ども達に相談すると、「なんとかしなきゃいけない」と動き始めました。次の日から土日になるため、外の小屋だと次の日の朝も鳴きます。そこで、以前教室でひよこを育てていた時に使っていたケースを使い教室で過ごさせることにしました。雄の鶏の陽向（ひなた）を連れに行く人、ケースを探す人、ケースの中に敷くわらを集めてくる人。それぞれが今の陽向のためになることを考えて動く3年2組の子ども達がありました。時間にして20分ほど。あっという間に陽向を教室に移すことができました。

教室に戻ってきた陽向は、なんだか昔のひよこのときを彷彿とさせます。この日は一斉下校だったため、名残惜しそうにみんなが陽向に別れを告げて下校しました。子ども達がいなくなった教室にぽつんと1羽いる陽向。動けるスペースも少なく、止まり木もない。そんな中でもけたたましく鳴く陽向。

私はそんな陽向の姿を見て、本当にここまで陽向を飼っていて良かったのか、家畜としては肉にする以外利用できない雄の鶏と暮らしてきて良かったのか、考えさせられました。

そんな中、前から鶏の引き取り先について色々な人相談させていただいていたのですが、クラスの子どものおじいさんから4羽引き取っていただけると話を聞いていました。冬休み中に訪問させていただき、その様子を写真で撮り、休み明けには子ども達にも紹介してありました。山間に、おじいさんが手作りで作った柵や手作りの小屋があり、自然豊かな場所で烏骨鶏や鶏を飼われています。現在、1つ小屋が空いていて、そこで学校の鶏達を飼えるということでした。大きさも学校の小屋とほぼ同じくらいで、周りに家が少なく、雄の鶏の鳴き声も問題ないそうです。

この土日に先に雄鶏を引き取っていただけませんか相談したところ、お受けしていただけるとのことでした。月曜日には、子ども達にこのことを伝え、どう思うか聞いてみました。Bさんは、「陽向と別れるのは、悲しいけど、仕方がないことだと思う。周りに迷惑をかけているなら、私たちが責任を考えなきゃいけない」と語りました。また、Cさんは、「あのまま陽向が狭いところにいると、病気になったりするかもしれない。だったら、広いところで暮らせるようにしてあげたい」と語りました。またDさんは、「私たちのせいで、他の動物達も飼えなくなるかもしれない。仕方がないけど、陽向を先に引き取ってもらうのがいいと思う」と話しました。

仕方がないと決意する子、まだ納得までいかないけど陽向にとって一番いいことは何か考えて決断する子など、急な話に動揺していましたが、前から考えてきたこの鳴き声問題が現実となり、受け入れようと考えていました。陽向にとっての幸せとは何か、私も子ども達も一生懸命考えて決断しました。

鶏達にとって3年2組の子ども達は、親のような存在です。自分達のやりたいことをやりつつ、自分達の



鶏が社会に与える影響も考えていかななくてはなりません。地域の方からの声は、はっきりと私たちの暮らしが漠然と考えていた問題を浮き彫りにいただきました。陽向とのお別れは、突然であり、残念ですが、鶏達との暮らしからまた一つ、本気で問題と向き合った子ども達がありました。



## この1年間の暮らしを伝えたい

### 「3年2組にわとりミュージカル」

3年生最後の参観日には、鶏との今までの暮らしを自分達の思いやアイデアを盛り込んで練習を重ね、劇や歌で紹介する「にわとりミュージカル」として発表しました。

卵との出会いからひよこの誕生、15個の卵とのお別れの場面を担当したグループは、卵から割れる様子を小道具を使い表現したり、クラスでの話し合いの様子を再現したり、あの時の臨場感を伝えられるように演技しました。そのグループに所属していたEさんは、他のグループの発表を見る



中で、自分達ももっとそれぞれの思いが伝えられるようにと願い、思いを伝える場面をつくりました。グループのメンバーが次々にその時の様子と呼びかけのように発表する演出を考え、みんなでつくりあげる発表にしようとする一人ひとりが活躍できる演出をぎりぎりまで考えていました。

雄の鶏「つばさ」行方不明事件や小屋のリフォームを担当したグループは、劇で様子を再現するだけでなく、名前の由来を発表したり、思いを作文発表にしたり、様々な表現方法を生かして発表しました。Fさんは、シナリオを主に考えていましたが、クロームブックに劇の流れを打ち込み、紙にしてメンバーに配ったり、監督のように演技を見ながらアドバイスしたり、自身のナレーションを暗記して発表しようとしたり、発表だけでなく裏方としても自分の役割を考え動いていました。そんなFさんは、2年生の時は人前で発表する時に緊張で声が震えて発表できないこともありましたが、この3年生の終わりに周りを見て仲間を支え、自分も自信をもって堂々と発表する姿に成長を感じます。

初めて鶏が卵を産んだ場面から、雄の陽向（ひなた）との別れを発表したグループでは、劇に加え、自分達がどのように卵を食べたのか、この1年間の暮らしから何を学んだのか一人ずつ発表しました。このグループのGさんは、リハーサルから中心になってみんなを支えアドバイスをし、どんどん表現をレベルアップさせていました。そんなGさんの日記には「『やりきった』というより『終わってしまった』という感じです」と綴られていました。この仲間とつくりあげる発表。それだけが目的ではなく、仲間と過ごす時間も大切にしたいというGさんの思いがこの言葉から感じられます。

本番当日、発表を終えた子ども達に「どうだった?」と聞くと、「緊張した」「気持ちよかった」という反応と共にHさんからは、「この仲間とこの緊張感を味わえてよかった」と返ってきました。楽しいこと、盛り上がること、悲しいこと、悔しいことなど共感できたり、分かち合えたりする仲間がいるからこそ、その体験がいつまでも心に残る経験となります。3年生の集大成として、子ども達がつくりあげた劇からは、子ども達の育ちとともに、かけがえのない仲間とともに成長しあえる集団になったと感じました。

# 鶏達との別れの日

出会いがあれば、別れがある。3月3日は、共に暮らしてきた鶏達とのお別れがありました。参観日を終わると、この日に向けて準備を進めてきました。運営委員を募り、運営は子ども達に任せました。

参観日の経験を生かして、準備をする子ども達。クロームブックの共同編集機能を使い、みんなでスライドショーをつくりあげてを提案したり、スライドショーに合わせてBGMを選んだり、全員が鶏達に手紙を読む場をつくったり、「にわとりミュージカル」を自分達の手でつくりあげたことが、この場でも生かされていました。

当日は、引き取り先から雄の鶏「陽向」も連れてきました。最後のにわとりとの時間を名残惜しそうに楽しむ子ども達。いつもと変わらない日常がそこにあるようでしたが、鶏達へ歌を歌い終えたあたりから、泣き出す人が出てきました。そして、いざ私の車に鶏を積み込み、出発の時間が近づくと、泣き出す子ども達も増えてきました。車が動き出すと、追いかけてくる人、いつまでも手を振り続けている人、声をあげて泣き続ける人・・・別れという節目を迎え、各々が感情を様々な形で表出しているようでした。鶏との出会いが、2組の子ども達にとってかけがえのないものになったからこそ、こうした別れの場面になったのだと感じます。

この節目に、「今までの感謝を伝えたい」と手紙も書きました。相手はちゃたまやの滝沢さんです。

Hさんの手紙には「命をいただくことは当たり前ではない。食べ物全部に育てた人の思いが詰まっていると思う」と綴っており、鶏を育てたことにより自分の周りの食べものは命であり、それをいただいている自分がいることを感じているようでした。Iさんは、「特に学んだことは命の大切さ、命をむだにしてはいけないこと。にわとりが卵を産んでいるすがたを見た時、すごく大へんそうで、命をかけてパワーを集めているかのようでした。ふだん気にしないで食べていた卵にも、こんなにもにわとりの気持ちがつまっているんだなと感じられました」と綴っており、身近な卵や身近な命を新たな見方で捉えているようでした。

そして、Jさんは、お別れ会を終えた日の日記に次のように綴っていました。

ぼくは、ひよこが生まれた時は、かわいかったから強引にもっていることもあったけど、だれかが「ひよこの本当のしあわせは何だと思う」と言っていて、ぼくはその言葉で心を動かされました。ぼくのにわとりとの日々は、その人だけのおかげではなく、みんながいたからできた大切な時間でした。

家畜として命をいただくことの意味はもちろんのこと、自分達の大切な命とのかかわりを通じて、子ども達は悩んだり、立ち止まったりしながら、命と本気で向き合ってきた日々があったように思います。それは、共に同じ鶏の成長を見つめ、共に同じことを経験しながらも、それぞれの生き方から考えたことをもとに意見を交わし合う仲間がいたからこそその学びがあったように思います。

## 当たり前ではなく ありがたいこと

鶏達と本気で向き合ってきた1年間が終わりを迎えました。

2組では、家畜との暮らしから学んだことについて、最後にみんなで話し合いました。

「同じことを経験した仲間と、こうやって意見を交流するのも最後になります。みんなが学んできたことについて、悔いのないように話してね」と私が伝えて始めた授業。「鶏との暮らしから学んだことを一言で表すと?」という問いに対して、Kさんは「命の大切さ」と答えます。その言葉を聞き、周りの子ども達も「俺もだ」「私も」と次々に共感していきました。Lさんは、「似てるけどちょっと違う。命のありがたさ」と続けます。その後も「命は当たり前じゃ



ない」「家畜の役目」と、子ども達は自分達の学んできたことは何だったのか言葉でおいていきます。「家畜の役目」と答えたMさんに、「役目ってどういうこと?」と問い返すと、「家畜にも命があって、それをいただいているから、家畜は命をくれるものだってこと」と答えます。どの一言も表現が違って、根底には、命を感じた暮らしがあったことがうかがえます。

また、Kさんの「命の大切さ」について、「みんなはどんなことから命の大切さを感じたの?」と聞くと、Nさんは、「ひよこが生まれたのは嬉しかったけど、15個の卵が生まれなかったことから、生まれてくることは当たり前じゃないって感じたから」と答えました。Oさんは、「私は雄のつばさがいなくなって、それまで5羽が元気に育っていくことが当たり前だと思っていたけど命があることって当たり前じゃないんだって思ったから」と答えました。同じ命の大切さを学んだと感じている子ども達の中でも、それぞれの印象に残っているエピソードはそれぞれでした。

そこで、グループの仲間と学んだことについて短時間話す時間を設けました。グループで思い出や学んできたことを語り合っている中、Pさんは「鶏との暮らしから命があることは当たり前ではないって感じたけど、こうやって3年2組の仲間と話し合えることだって当たり前じゃなくってありがたいことだよ」と友達に考えを伝えていました。クラスの解散を目の前にし、3年間当たり前のように過ごしてきた仲間との生活が終わる・・・実習生や鶏、2年間お世話になった院生など、数々の別れを経験してきた子ども達だからこそ、今こうして語り合える仲間がいることへのありがたさを感じているPさんなのだと思います。

またQさんは、「鶏と僕たちってつながっている。鶏の卵は、鶏の命が入っているし、それを毎日のように僕は食べているから、命と命がつながっているような気がする」と仲間と話していました。そんなQさんは、この日の振り返りに次のように綴っていました。

ぼくらは、毎日のように卵を食べています。それは、命をもらっているということと同じだと思ったからです。なぜかという、その卵には何人もの神様がいるような気がします。にわとりや生産者、スーパーの売り場の人などが大事に大事にしてきた卵を食べているからです。

鶏との暮らし、ちゃたまやの滝沢さんとの出会い、社会科で学んだ生産者の方の工夫などこの1年間の学びが全てつながって「命」を感じているQさんがいました。

最後にRさんの振り返りを紹介します。

命はとてつもないキセキです。理由は、命はかんたんには生まれませんからです。命は深い深い線につながっていると思いました。これからは生かしたいことは、家畜や人間の命を大切にしたいことです。そして、命をかんたんにおだにはしてはいけません。命ってお母さんとお父さんのがんばりでできたものだと私は考えています。これからも命をいただけることをありがたく思い、いなくなった命もいっしょにせおっていきたくです。

鶏との暮らしから、自分の命について見つめ直しているRさん。鶏の親のような存在で1年間暮らしてきたRさんだからこそ、暮らしを終えるこの時に、自分自身のお家の人の存在を改めて感じ、命は親からもらったかけがえのないものであると感じているようでした。

今こうして私たちが生きていること、日常生活を送ることができている反面、この世に生まれてこれなかった命もたくさん存在しています。生きていれば嬉しいこと、楽しいこともあれば、悲しいこと、辛いこと、苦しいこともあります。けれどもそれらを感じられるのも、命あってこそです。改めて、命があることは当たり前ではなく、ありがたいことだと感じる事ができた、1年間の学びがありました。

## 最後の卵は お世話になった先生方へプレゼント

